

学習パートナーとして



歌に興じる教育文化運動部長

(1)

狭山事件は今、52回目
の春を迎えている。第3次
再審闘争は、高裁、高検そ
して弁護団の三者協議を中
心に動いており、この間、
21回を数える協議のなかで
167点の証拠が開示され、弁
護団からは開示された証拠
をもとに、無実を明らかに
する150点をこえる新証拠を
提出してきた。

また、本年1月の52回三
者協議において「証拠リス
ト」が東京高検から開示さ
れている。客観的にみれば、
いよいよ第三次再審請求の
大詰め段階にきている。

(2)

2月に弁護団から「手
拭い」に関する新証拠と補
充書を東京高裁に提出した

ともに学ぶ教室を よみかき交流会in白浜

2014年度よみかき交流会が1月24日、25日に白浜町ホ
テルシーモアでひらかれた。
支部代表者・識字生・行政関係者など約130人が参加した。



ひろうされた学習資料



「識字の楽しさとこれから」について
意見を出しあった

初日の研修では、体験発
表として鳴神識字学級の北
内ますみさんから「鳴神識
字学級のあゆみ」として、
差別によって文字を奪われ
てきた歴史、識字学級での
学習内容の報告があり、識
字は「地位向上」「心を磨
きあう」場所で、解放運動
の原点「識字の灯」を消さ
ないよう、自分たちの思い
を次世代に伝えていけるよ
う活動したいと報告があつ
た。つづいて、実践発表で

は杭ノ瀬識字学級の講師、
松江頼子さんから「私が識

が、この手拭いは、市内の
米屋が顧客に配った内の1
本だ。実際には、同じ手拭
が事件後に石川さん宅で確
認されている。このことか
らも被害者を縛っていた手
拭いが石川さん宅のもので
はないことは明白である。

無実の証拠はこれだけ
でない。「脅迫状」「万年筆」
「腕時計」をはじめ石川さ

張「全証拠の開示」を柱に とりくみをすすめよう!

しかし、警察が「石川さん
宅には複数配られていた」
との事実の改ざんやテレビ
ニュースを観て、あわてて
手拭いを都合つけたとする
検察官の主張が有罪の重要
な証拠になっていた。

今回、弁護団は、ニュー

私たちは「石川さんの運
命は、私たちすべての運命」
とし「差別は許さない」と

(3)

裁判の行方は、大詰めに
きているとはいえ、いまだ
に多くの証拠が隠されてい
る。「全証拠の開示」「事実
調べ」を柱に、決意も新た
に一層のとりくみをすすめ
よう!

ヘイトスピーチ対策についての意見書が 県議会で可決されました

和議第174号
ヘイトスピーチ対策について法整備を含む強化策を求める意見書(案)

近年、一部の国や民族あるいは特定の国籍の外国人を排斥する差別的言
動(ヘイトスピーチ)が、社会的関心を集めている。

昨年、国際連合自由権規約委員会は、「あらゆる形態の人種差別の撤廃に
関する国際条約(人種差別撤廃条約)」上の人種差別に該当する差別的言動
の広がりに懸念を示し、締約国である日本に対し、このような差別的言動に
対処する措置を採るべきとの勧告をした。

さらに、国際連合人種差別撤廃委員会も日本に対し、法による規制を行
うなどのヘイトスピーチへの適切な対処に取り組むことを強く求める勧告を
行っている。

最近では、京都地方裁判所及び大阪高等裁判所において行われた、特定
の民族・国籍の外国人に対する発言に関する事件について違法性を認めた
判決を、最高裁判所が認める決定を下した。

ヘイトスピーチは、社会の平穏を乱し、人間の尊厳を侵す行為として、そ
れを規制する法整備がされている国もある。2020年には、東京オリンピック・
パラリンピック競技大会が開催されるが、ヘイトスピーチを放置することは
国際社会における我が国への信頼を失うことにもなりかねない。

よって、国においては、表現の自由に十分配慮しつつも、ヘイトスピーチ
対策について、法整備を含む強化策を速やかに検討し実施することを強く求
める。

以上、地方自治法第99条の規定により意見書を提出する。

平成27年3月6日

様

和歌山県議会議長 坂本 登
(提出者)
谷 洋一
長 隆司
坂 光夫
賀 秀樹
角 田

(意見書提出先)
衆議院議長
参議院議長
内閣総理大臣
法務大臣

安な気持ちで識字学級の講
師を引受けた2年間の思い
と定年を迎えて、再度識字
学級の講師としてとりく
み、学習や作品制作をとお
して「人の和」や「人の心」
を感じ、字だけではなく喜
びも楽しみも悲しみも分か
ち合い、助け合い支えあつ
ていく優しい人の心の和が
大切だと自分自身が学んだ
と報告があった。その後、
各識字生の学習資料を見学
し、7つの分会で「識字
の楽しさとこれから」につ
いて協議があった。また、
夜の懇親会は笑いのたえな
い盛り上がりだった。

2日目は、各分散会報
告と識字教育の推進にかか
わって、大阪市内識字・日
本語教室連絡会代表、丸山
俊夫さんから「識字のこれ
までいまそしてこれから」
と題して講演があつ

た。大阪市内でのとりくみ
をはじめ、識字教室は、か
つて差別のために文字を奪
われてきた人の学習の場
であり、さらに70年代頃
外国人もたくさん通うよう
になった。今の識字教室は、
教室にきて、楽しいことや
苦しいことを語り合える大
切な「居場所」になってい
る。よみかきを目標に、学
習パートナー(一方的に日
本語を教えるのではなく、
教える方も一緒に学んでい
く)とし、大阪市民に識字
問題を知ってもらおうよう
後もとりくんでいくと語つ
た。

文化の窓

「被差別部落の暮らしから」

中山英一著、朝日選書、
ISBN978-4-02-259706-2、1998年7月25日発行



著者が長野県連書記長時
代に多くの差別事件にとり
くんだ経験から記された一
冊。第4章には小林一茶が
詠んだ被差別民の句が紹介
されている。一茶が生涯詠
んだ句はおおよそ2万句。そ
のなかでも被差別民を詠ん
だ句は約50句にもほのぼ
ど。どの句も労働の尊さや
苦、たくましさ、自尊心が
詠まれている。必見の
一冊。

◆詳しくは、県連・教宣部まで
TEL 073-473-2301